田川（たがわ）　志織（しおり）さん　（松江市出身）
2018 年度 2 次隊　青年海外協力隊
派遣国：ガーナ　職種：青少年活動
2020 年 10 月 18 日（日）中国新聞 SELECT 掲載

※中国新聞社の許諾を得ています

目や頭使って支援再考

段ボールで作った「パソコン」を使った授業

将来的に国際協力を生業にしたいと考えていた。今できる範囲の支援活動をしたい、知識習得以前に自分の目で途上国を見たい。この二つの思いを抱え、青年海外協力隊員としてガーナへと派遣された。

2019 年からガーナで始まった小学生向けの性教育の授業。同性婚についても触れている。これは現地の教員たちから大きな反感を買った。性教育や同性婚容認に反発していたのではない。欧米諸国の新たな価値観の一方的な押し付けに違和感を抱いたのだ。

途上国と聞くと想像する「学校へ行けない子どもたち」。小学校へ行かない子は確かにいた。しかしそれは貧しいからでも学校がないからでもない。学力に自信がなく不登校となった、彼ら自身の意思であった。

派遣前に途上国について調べた情報のみで考えを固めていたらどうだっただろう。性教育、同性婚容認の意義を一方的に説いてはいなかったか。学校へ行けないのは貧しいからだとして、学校建設や貧困削減を模索したかもしれない。現地の考えを聞くことなく、知識が足りないのだとして。

支援の内容や対象は目の前の人を見て感じ、考えなければならない。前知識のない派遣は、私にこう気付かせてくれた。「途上国の人」ではなく「友人」としてガーナ人と過ごせたことは私の貴重な財産となった。

情報が一方的に流れ込む現代では、固定観念が無意識に確立されていることがある。一方的に受け取る情報だけではなく、自分の目や頭を使い、途上国支援の在り方についていま一度考えてみてほしい。